



モンシロチョウ

モンシロチョウはチョウ目シロチョウ科に属するチョウであり、
日本の里山の代表的な昆虫である。

名前のおり、はねは白く、その表側（背側）には、
丸くて黒い斑紋がある（写真2-1、2-2）。

幼虫はイヌガラシやキャベツのようなアブラナ科植物で育つ（写真2-3）。



写真2-1 キャベツの葉の上で休んでいる。
はねの表側の黒い斑紋が目立つ。



写真2-2 はねを閉じて休んでいる。はねの
裏側には目立った模様はない。



写真2-3 好んで産卵する野生植物のイヌガ
ラシ。

1. モンシロチョウの教材としての特性

(1) 人里にくらす昆虫

畑や花壇など人工的な環境に生えている植物によく産卵するため、校庭に呼び寄せやすいチョウである。「うちの学校があるのは市街地なのでモンシロチョウはいない」とあきらめないで、校庭の陽の当たるところにアブラナ科植物を植えれば、こちらからはチョウを見つけられなくても、チョウの方で食草を見つけてくれる。東京都内の小学校であれば、

ほとんどの学校にモンシロチョウは飛来するはずである（写真2-4）。それどころか、市街地は食草が植えられている場所が少ないため、モンシロチョウが集中して卵を産みつける可能性がある。学校内に明るい空き地があれば、植木鉢でも良いのでとにかく、アブラナ科植物を植えておくことをすすめる（写真2-5）。

(2) 幼虫は市販の野菜でも飼える

幼虫はイヌガラシ（写真2-3）などの野生のアブラ



写真2-4 鉢植えのコまつナに飛来したモンシ
ロチョウ（コまつナの鉢植えについては6ペ
ージ参照）。



写真2-5 校庭に産卵用にコまつナの鉢植え
を置く。日向に置くのがポイント。



図2-1 関東近辺でのモンシロチョウ成虫が見られる時期

ナ科植物ばかりでなく、キャベツ・ブロッコリー・コマツナ・貝割れ大根などのアブラナ科の野菜もよく食べる。農薬の影響が無い野菜であれば、八百屋で購入したものをそのまま利用できる。

(3) 飼育する期間が短い

幼虫期間は、暑い時期は2週間ぐらいと短い。アゲハのような大型の種類では3週間ぐらいかかるのに比べ、飼う期間が短く、それだけ、飼育の負担が少なくてすむ。

(4) 成虫での体の観察は難しい

体が小さく、止まるときははねが腹部をかくしてしまうので、頭・胸・腹など体の観察は難しい。体の観察にはアゲハが適している。

2. モンシロチョウの発生時期と飼育に適した時期

成虫が見られる時期は地域によって多少異なるが、関東近辺では3月中旬から11月上旬ぐらいまでである。この間に図2-1のようにおよそ5回の発生をくりかえす。

モンシロチョウがたくさん飛ぶのは5～6月と9～10月である(図2-1)。越冬中に死亡する蛹が多いため、4月に飛んでいるモンシロチョウは少ない。この時期に校庭のキャベツにモンシロチョウが卵を産みに来なかったからといって心配しないように。次の世代が成虫になる5月～6月上旬の飼育をめざして食草の準備をすること。

6月中旬を過ぎると、写真2-6のようにアオムシコマユバチという寄生バチに寄生されやすくなり、モ



写真2-6 寄生されていたモンシロチョウ幼虫とその体内から出てきてマユとなったアオムシコマユバチ。黄色い楕円形の1つ1つがハチのマユ。

ンシロチョウの数は減っていく。アオムシコマユバチは小さな幼虫から大きな幼虫まで、モンシロチョウの幼虫であればどのような大きさの幼虫でも寄生している可能性がある。

9月中旬からは、再びモンシロチョウの数は増える。この時期はチョウの数が春より多く、食草もキャベツやブロッコリーの苗が園芸店で入手しやすい。一学期にモンシロチョウの飼育に失敗したときは、秋に再チャレンジするのも良い。ただし、11月になると通常の状態では休眠蛹となり、チョウの羽化は春まで確認できない。秋の飼育は9月中旬から10月末までと覚えておいてほしい。

3. モンシロチョウの食草(幼虫の餌となる植物)

(1) どんな種類があるのか

モンシロチョウの幼虫が食べるのはアブラナ科植物である。学校で準備しやすい種類としては、キャベツ・コマツナ・西洋ワサビ(ホースラディッシュ)があげられる。それぞれ食草の種類によって準備する時期や方法が異なる。

(2) どうやって準備するのか

①キャベツを八百屋から買って来る

モンシロチョウの幼虫が手に入ったけれど、とりあえずの食草が無いときはキャベツを購入する。

現在、日本では残留性の高い農薬は使用が禁止されているので、農薬の影響が強い、外側を覆っている葉を取り除けば、買って来たその日から餌として使える。糞が少し水っぽくなるが、内側のうすい黄緑色の葉でもモンシロチョウは十分育つ。

②八百屋で買う、あるいは

給食で使った残りのコマツナを植える

買った直後のコマツナは、農薬の影響で幼虫が死ぬおそれがあるので使わない。しかし、以下のようになると、モンシロチョウ幼虫の餌としてコマツナはとても使いやすくなる。とくに産卵させたり、小さな幼虫に餌として与えたりするには、葉がやわらかいのでキャベツよりも使い勝手が良い。

スーパーマーケットなどで、根付きのコマツナを購入する。根が半分ぐらい切られているコマツナでも充分根づく。給食で根付きのコマツナを使うときには、使わなかった根元の部分を給食室からもらうと手軽である(写真2-7)。

開ききった葉はしおれやすいので、植えつける前に根元から取り去る。写真2-8は、左の株は購入したそのままのコマツナ、右2株はこれから植えつけるコマツナ。右2株は大きな葉を取り除いてある。写真2-9は植えつけたばかりのコマツナ。ビニールポットに根が埋まるように植え、根づくまで(1週間ぐらい)は萎れないように陽の当たらないところに置く。それでも葉が萎れるようだったら、植えつけたばかりのポットを、水を張ったトレーにしばらくつけておく。写真2-10は植えつけ後1週間がすぎたもの。



写真2-7 給食では使わないコマツナの根元の部分。



写真2-8 植えつけ用のコマツナの準備。



写真2-9 植えつけ直後のコマツナ。

2週間ぐらいすれば完全に根つき、新しい葉も開く。この頃になると農薬の影響もなくなるのでエサとして使用可能となる。写真2-11は植えつけ後1か月ぐらいのもの。葉の数が多くなっているので、1株で1匹の幼虫が蛹まで育つことができる。

③市販のキャベツ苗を買う

i) 4月に購入

4月に入ってすぐにキャベツなどの苗を購入すれば、6月の飼育に間に合う(写真2-12、13)。5月になるとキャベツ苗を売っているところが少なくなるので、購入する時期をのがさない。

苗を植えるときには、市販の野菜用の培養土を購入した方がキャベツの生長が良い。栄養が良いとモンシロチョウがよく卵を産む柔らかい葉がたくさんついたキャベツとなる。しおれるのを防ぐために、植えつけてから根づくまで数日間は日影に置く。

ii) 2年生の秋に購入

アブラナ科植物は低温に強く、高温に弱い。キャベツの苗の植えつけは秋に行くと生長が良い。しかも、苗も手に入りやすい。2年生の生活科でトマトや朝顔を育てた後の植木鉢に、秋になってからキャベツの苗を植えつけても良い。植えつけは9月のお彼岸ごろまでに行くと、翌春に大きな株となる。

④時間の余裕のあるときに西洋わさび

(ホースラディッシュ)を植えておく

西洋ワサビ(ホースラディッシュ)(写真2-14)は多年性なので株を何年にもわたって利用できる。すぐにモンシロチョウを飼育する予定がなくても、時間のあるときに植えておくと、飼いたいときに大株になっていて便利である。大きな種苗会社で販売して



写真2-10 植えつけ1週間後のコマツナ。



写真2-11 植えつけ1ヶ月後のコマツナ。



写真2-12 4月に植えたキャベツの苗(6月に撮影)。

いるので、インターネットなどで調べると入手先がわかる。

西洋ワサビは茎が長いので、葉を切り取って水に挿して使用する。葉が大きいので、1枚の葉で2匹のモンシロチョウを育てることができる。

4. モンシロチョウの入手方法

(1) 卵

①野外で食草に産み付けさせる

モンシロチョウは日向を好むので、卵を産んでもらいたいときは、食草はかならず日向に植える。鉢植えの場合も日向に置く。

モンシロチョウの卵は軟らかくてつぶれやすいので、卵だけ食草から外して持ち帰ることはできない。卵が欲しいときは、食草を校庭に植えてチョウに産卵してもらるのが一番入手しやすい。

②野外に探しに行く

i) 探し方

モンシロチョウはアブラナ科野菜に卵を産むので、キャベツ・ブロッコリー・チンゲンサイ・コマツナなどの畑で探す。ただし、大規模な畑は農薬を使用している可能性が高く、モンシロチョウは少ないこ

とが多い。

農薬の使用頻度が少ない家庭菜園(写真2-15、16)は昆虫探しにはおすすめの場所である。また、食草が少ないと集中的に卵が産みつけられ、狭い面積の割にはたくさんの卵が見つかる可能性がある(写真2-17)。

ii) 卵の採り方

モンシロチョウの卵は殻が柔らかいので、必ず食草ごと採集する。食草が萎れると卵から孵った幼虫が食べられなくなる。卵がついている食草は萎れないように多めにとってくる。あるいは、卵のついた葉を少しだけ切り取るのみにし、これを飼育容器に移すときに食草を足す。

iii) 持ち帰り方

持ち帰る容器を直射日光にあてて蒸らすと、卵が死んだり、食草がくさったりするので気をつける。

③昆虫飼育ケースの中で産ませる

少し難しいが、モンシロチョウの扱いに慣れたらケースの中で産卵させてもよい。1匹のメスが1～2日の間に60卵ぐらい産むこともあるので、クラス全員が1匹ずつ飼うことも可能である。しかも、



写真2-13 すでに卵を産みつけられ、観察するために教室に置かれたキャベツ苗。キャベツの生育のために、1日のうち2～3時間は陽があたる場所に置く。



写真2-14 西洋ワサビの大株。葉の形は季節により変化し、秋は切れ込みの多い葉に、春から秋は、株の左側に見えるような丸い葉となる。



写真2-15 住宅地のなかの家庭菜園（手前と奥がキャベツ。中央がダイコン）



写真2-16 道ばたの家庭菜園（植えてるのはブロッコリー）



写真2-17 キャベツの苗に産みつけられたモンシロチョウの卵。

産卵日が近いので、幼虫の発育が揃っていて授業を進めやすい。詳しい産卵方法については13ページのコラム1を参照。

(2) 幼虫

① 野外での探し方

幼虫を探すときは、まず食草に食い痕があるか確認する。葉に食い痕があれば、幼虫がいる可能性が高い(写真2-18)。コロコロした糞もあれば、幼虫が見つかる可能性がさらに高くなる。

② 持ち帰り方

食草がアブラナ科植物ミカン科植物に変わるだけで、アゲハ幼虫の持ち帰り方と方法は同じである。

(3) 成虫

① 野外での探し方

i) 蜜源植物のそばで待つ

モンシロチョウは低いところをわりあいゆっくり飛ぶので、子どもでも捕まえやすい。モンシロチョウ

ウはタンポポ・菜の花・ハルジオンなど黄色系の花でよく吸蜜する。このような花の前でモンシロチョウがやってくるのを待つと良い(写真2-19)。

ii) 食草のそばで待つ

キャベツなどのアブラナ科植物があると、羽化後間もない成虫がはねを休めていることがある。また、交尾相手を探して飛び回っているオスや産卵のために飛来したメスなどを捕まえることもできる。

② 採り方

虫採り網を使う。蜜を吸うために花に止まった時や、卵を産むために食草に止まった時など、どこかに止まった瞬間に網を振ると捕まえやすい。

③ 持ち帰り方

プラスチック製の昆虫飼育用ケースに入れる。虫かごはチョウが逃げる可能性があるので使用しない。ケース内が蒸れるとチョウが死にやすくなるので、成虫が入ったケースは必ず日影に置く。もどいたら、すぐに餌をやる(11、12ページ、成虫の餌のあたえ方参照)



写真2-18 写真2-16のブロッコリーの苗を近くから写したところ。たくさんの食い痕がある。中央は、モンシロチョウの終令幼虫。



写真2-19 吸蜜中のシロチョウのなかま。このように、チョウがどこかに止まっているときに捕まえやすい。



写真2-20 コマツナ1鉢で1匹の幼虫を育てた時の、葉の減り方。

5. モンシロチョウの飼い方

(1) 幼虫

①発育の様子

卵→(ふ化)→1令幼虫→(幼虫脱皮)→2令幼虫→(幼虫脱皮)→3令幼虫→(幼虫脱皮)→4令幼虫→(幼虫脱皮)→5令(終令)幼虫→前蛹→(蛹化脱皮)→蛹と成長する。それぞれの令期の幼虫の大きさの目安は表2-1に示す通りである。

②飼育温度

モンシロチョウを飼うのにちょうど良い温度は20℃くらいである。高くても25℃くらい、低いときでも18℃くらいが良い。25℃以上の日が何日も続くと、病気で幼虫が死んでしまうことがある。したがって、モンシロチョウの幼虫の飼育は6月までに終了するようにするか、あるいは9月中旬以降が良い。

また、プラスチックケースなどで幼虫を飼育するときは、直射日光にあてると、中が高温になって幼虫が死にやすくなる。飼育ケースは決して直射日光

に当てないこと。

③発育期間

卵から成虫になるまでの期間は季節によって異なるが、平均するとだいたい1ヶ月。気温が高い時期(最高気温が25～30度くらい)、気温が低い時期(最高気温が20度くらい)、それぞれの時期に成虫になるまでにかかる期間のめやすを表2-2に示す。

④幼虫の世話の仕方

i) コマツナの場合

大中あわせて5～6枚の葉があるコマツナ1株で幼虫1匹が蛹になるまで飼える(写真2-20)。鉢植えだと食草が途中で萎れないので、葉を食べつくすまで鉢に水を与える以外世話をする必要がない。

1枚の葉にたくさん卵が産みつけられた場合は、コマツナの葉はうすいのですぐに食べつくされてしまう。そのようなときは、幼虫を新しい餌へと移動させる。

写真2-18のような大きな幼虫は指でつまみ上げて、小さな幼虫(写真2-21)は小筆(写真2-22)の穂先に乗

幼虫の発育ステージ	体の長さ
1令幼虫	1.5～3mm
2令幼虫	3～6mm
3令幼虫	6～12mm
4令幼虫	12～18mm
5(終)令幼虫	18～30mm

表2-1 コマツナで飼育したモンシロチョウ幼虫の大きさ。餌や飼育温度などで幼虫の大きさは多少変わってくる。

気温が高い時期(初夏～初秋)		気温が低い時期(初春、晩秋)	
卵	5～6日	卵	2週間以上
幼虫	10～12日	幼虫	3～4週間以上
蛹	5～6日	蛹	2週間以上

表2-2 モンシロチョウの成長に必要な日数

せて新しい葉に移す。幼虫を傷めそうで心配なときは、新しい株と幼虫のついている葉をくっつけ、幼虫自ら歩いて移動してもらう。幼虫はおなががすくと、新しい餌の方へと自分で移動する。

幼虫を移すときの注意

1令幼虫から4令幼虫まで、それぞれの発育ステージで体がパンパンに膨らむと、餌を食べなくなり、葉に吐いた糸につかまり、半日から1日程度じっとして過ごす(写真2-23)。この時期の幼虫を「眠(みん)に入っている」と言う。体の中で脱皮の準備が進んでいる幼虫のことである。眠に入っている間に新しい幼虫の皮膚がこれまでの幼虫の皮膚の下にできてくる。頭も同じで、これまでより大きな頭の殻が今までの頭の殻の後側にできてくる(写真2-24)。眠に入っている幼虫を食草から無理に外すと、脱皮がうまくいかなることがある。脱皮が完了するまで、なるべくいじらない。また、このような幼虫をいったん葉からはずして再び葉に戻しても、葉につかまれず落ちてしまう。眠に入っている幼虫を葉から外してしまったときは、幼虫を容器の底にそっと置いておく。そして、脱皮後食草まで自力で歩いていけるように食草を幼虫に近づけておく。

(2) 蛹

①そのまま

食草にくっついた状態で蛹になったときはそのま

ま羽化を待つ。蛹になってからチョウが羽化するまでは通常5~6日ぐらいである。ただし、これも幼虫期間と同じように、気温によって長くなったり、短くなったりする。

蛹化場所の確認で大切なことは、羽化したチョウがどこか高いところにつかまり、はねをぶら下げたような格好で徐々にはねを伸ばしていける空間があるかどうかである(写真2-25~27)。ぶら下がったスタイルのままつかまれるところがないと、チョウのはねが綺麗に伸ばせなくなり、縮れたはねのチョウになってしまう。

②外したほうが良い場合

プラスチックケースのようなツルツルしたところで蛹になった場合には、蛹から出てきたチョウがつかまることができなくて、下に落ちてしまう(写真2-28)。下に落ちたままにするとチョウのはねが縮まったままだったり、曲がったりするので、蛹をそこから外す。外すときは、蛹の糸に霧吹きでたっぷり水を吹きかけ、30秒ほど待って糸がゆるんでから、蛹全体を指で包むようにして引く。

③外した蛹の羽化させ方

蛹の絵(図2-2)を見るとわかるように、成虫の足は蛹の腹側に格納されている。足のある腹側を下にして置くと羽化したときにチョウがしっかり自分の足で歩くことができ、自力ではねを広げられる場所へと移動する。足のある腹側を上に向けて置くと、羽化したチョウは足で空を蹴るばかりで、歩けず、



写真2-21 コマツナの葉で育つ2~3令の小さな幼虫。このようにたくさんの幼虫がついていると、生長するにつれて大食いになるため、2~3日後には丸坊主になってしまう。写真のような状態になったら、他の葉に幼虫を移す。



写真2-22 小さな幼虫を移す小筆と、虫眼鏡。最近では100円ショップのプラスチックの虫眼鏡でも結構良く見える。



写真2-23 4令幼虫の眠の状態(左側が頭)。体全体が風船のように張っている。



写真2-24 眠の幼虫の頭部の拡大写真。写真のように、頭が前に突き出し、後ろ側に新しい頭の殻がせり出している。



写真2-25 写真のようにキャベツの葉上で蛹化したときは、そのまま羽化を待つ。



写真2-26 蛹から出たばかりのチョウのはねは写真のように縮まっている。足でしっかりキャベツにつかまり、徐々にはねを広げていく。このときに下に落ちて、どこかにつかまれないと、はねをきれいに広げられない。



写真2-27 きれいに広がっていても、しばらくははねが柔らかい。この時期にチョウを平らな所に移すと、はねが曲がったままだ固まってしまうので注意する。



写真2-28 このような蛹から羽化したチョウはつかまれずに下に落ちてしまうので、本の背表紙から外す。



写真2-29 足が下になるようにして、折った新聞紙の谷のところに蛹を置く。



写真2-30 新聞紙ではなく、段ボールの凹凸を利用して良い



写真2-31 蛹にはザルをかぶせる。羽化したチョウは歩いてザルまで行くと、登り始め、適当な高さのところで止まり、はねを広げ始める。



写真2-32 羽化したチョウがザルにつかまってはねを広げているところ。

はねを伸ばすためのつかまり場所まで移動できない。そのうちにはねが固まってしまう、縮れたはねのチョウになってしまう。

腹側を下にした蛹がころがらないように、新聞紙や濾紙などざらざらした紙を蛇腹におり、谷の部分に腹部を下にした蛹を置く(写真2-29)。あるいは段ボールの凹凸を利用して良い(写真2-30)。つつ

るした紙だと、チョウの足がすべって歩けないことがあるので注意する。さらにチョウがつかまってはねを広げやすいように、蛹にはザルをかぶせておく(写真2-31、32)。

(3) 成虫

成虫の餌としてはハチミツを水で10倍程度に薄

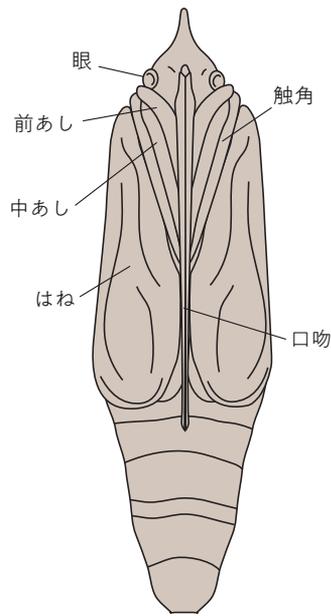


図2-2 モンシロチョウの蛹の腹側の様子

めたもの、あるいは、10%程度の砂糖水を用意する。これをスポンジやティッシュペーパーに含ませ（蜜がひたひたするくらい）、チョウの入っているケース内に入れておくと、チョウが自力で吸う（写真2-33、34）。

スポンジやティッシュペーパーを入れるのは、チ

ョウの体が蜜で汚れないようにするためである。

チョウの扱いに慣れている先生だったら、写真2-35のように丸くなっているチョウの口を楊枝の先で伸ばし、口の先をハチミツ液や砂糖水に誘導させても良い。この方法が、いちばん確実にチョウに餌を与えることができる。



写真2-33 ティッシュペーパーに浸したハチミツ水を吸うチョウ



写真2-34 モンシロチョウやスジグロシロチョウは黄色い花に給蜜に訪れることが多いので、黄色いスポンジにハチミツ水をひたし、成虫のエサとしている。もちろんタンポポなどの蜜源植物を入れても良いが、花は咲いていても蜜は他のチョウに吸われて空っぽなことがある。花と同時にハチミツ液などの餌も入れておいた方が安全である。



写真2-35 楊枝の先で丸くなっているチョウの口を伸ばし、先端をハチミツ液に誘導して飲ませようとしているところ。

ケースの中で卵を産ませる方法



写真2-36 モンシロチョウを交尾させているところ。写真では金網製のケージを使っているが、時間を2、3時間に限ればプラスチックケースでも充分である。



写真2-37 昆虫飼育用プラスチックケース内で、コマツナに産卵させているところ。



写真2-38 教室の窓辺で、食卓用ネットを使い、キャベツに産卵をさせているところ。キャベツは茎を水につけておけば萎れない。

(1) 交尾メスの入手方法

① 野外でメスを採集

野外で採ったメス成虫はたいてい交尾を済ませているので、オスと一緒にさせなくても卵を産む可能性が高い。メスだけしか採れなくても、採卵にチャレンジしてみると良い。成虫の寿命は長くて2週間ぐらい。ただし、気温が高い季節はそれより短く、逆に気温が低い季節はそれより長くなる。また、野外のチョウの寿命は通常1週間程度といわれている。

午後遅くなると、たとえオスは飛んでいても、メスはどういうわけか見つけにくくなる。メスを採集したいときは、昼過ぎくらいまでに採りに行く。

② ケースの中で交尾させる

昆虫飼育用プラスチックケース、あるいは食卓用ネットのなかに未交尾のオス、メスを入れる。

交尾や産卵には光が必要なので、半日程度直射日光があたる日向にケースを置く(写真2-36)。室内で試みるときは、蛍光灯の明かりの下に、チョウの入ったケースを置く。これはモンシロチョウが紫外線を可視光線として感知し、オス・メスの違いを紫外

線の反射の有無で見分けているからである。

メスは羽化直後から交尾可能だが、オスは羽化2～3日しないと交尾しない。オスの方が早く羽化したときは、メスの羽化を待つ。この時、オスを弱らせないように、メスが羽化するまで直射日光にはあてず、なるべく涼しい場所で飼育する。

(2) 卵を産ませる

卵を産ませるための食草は、そのまま幼虫の餌として利用できるように、ポットに植えたコマツナが扱いやすくおすすめです(写真2-37)。これを、交尾したメスがいるケースの中に入れ、半日程度直射日光があたる窓辺などに置く。成虫の餌の蜜も忘れずに入れるようにする。半日程度と時間を限るのは日差しによりケージ内が高温になりすぎる影響を避けるためである。

また、コマツナを準備していないときはキャベツが使える。キャベツのような大きな食草を利用するときは、食卓用ネットを利用するのが簡単である(写真2-38)。食卓用ネットは100円ショップで売っているもので十分使える。

アブラナ科植物を食草とする モンシロチョウ以外のイモムシ

キャベツなどのアブラナ科植物には他のチョウ目の幼虫もいる。
かならずしも、イモムシだからといってモンシロチョウの幼虫とはかぎらない。



写真2-39 タンポポの花の蜜を吸っているスジグロシロチョウ成虫。はねの黒いすじが目立つ。



写真2-40 スジグロシロチョウの卵（白い）



写真2-41 スジグロシロチョウ終齢幼虫



写真2-42 モンシロチョウの卵（黄色い）



写真2-43 モンシロチョウ終齢幼虫



写真2-44 夜間にシュウメイギクの葉の上に出てきたヨトウムシの幼虫。

(1) スジグロシロチョウ (写真2-39)

モンシロチョウと同じシロチョウ科のチョウであり、卵(写真2-40)、幼虫(写真2-41)、成虫すべてがモンシロチョウ(写真2-42、43)とよく似ている。ただし、モンシロチョウは陽当たりのよい畑や草原に、スジグロシロチョウは林やそのまわりに多く、2種はすみ分けている。学校の校庭で見られるのはモンシロチョウのことが多い。

(2) ヨトウムシ (写真2-44)

幼虫の姿は見えないが、キャベツの芯のほうまで食べ痕があるときは、ヨトウムシ(日中は土の中にもぐっていて、夜になるとキャベツを食べに出てくる幼虫。とても大食いで、キャベツの葉をあっとい



写真2-45 コナガの幼虫。

うまに筋だけにしてしまう)の可能性が高い。

(3) コナガ (写真2-45)

大きく成長しても、幼虫は1cmと小さい。モンシロチョウの幼虫は指でそっとさわってもあまり動かないが、コナガの幼虫はさわるとくりくりと動き、すぐに葉から落ちようとする。